

マルコによる福音書 4章 10節～20節

2015年4月23日

古本 靖久

1、聖歌 467番 「道の辺(ほとり)に 蒔く種は」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 67 ページ）

4、テキストの位置

前回、わたしたちは「種と土地のたとえ」について学びました。

このたとえは当時の人々にとって身近な「種」と「土地」を用いており、また今の自分はどの土地だろうと、自分のことと照らし合わせて考えることが多いため、とても記憶に残るものだったのでしょう。

ガリラヤ宣教②	3:13-19	呼び寄せられた 12 人
	3:20-21	イエスを理解できない家族
	3:22-30	イエスを理解できない律法学者
	3:31-35	イエスの母、兄弟、姉妹とは
	4:1-2	たとえで語る
	4:3-9	種と土地のたとえ
	4:10-12	たとえによって隠されるもの
	4:13-20	種と土地のたとえの解釈
	4:21-32	たとえ集
4:33-34	イエスはたとえで語る	

そして今回取り上げるのは、何故イエス様はたとえを用いて語られるのか、という理由と、「種と土地のたとえ」の解釈です。

聖公会の聖書日課では、この「種と土地のたとえ」は A 年に並行箇所であるマタイ福音書（マタイ 13:1-9）が読まれます。その時には「種と土地のたとえの解釈（マタイ 13:18-23）」の部分もあわせて読まれるのですが、「たとえによって隠されるもの（13:10-17）」は飛ばされます。そのため、マルコ 4:10-12 もあまりなじみがないかもしれません。もしかすると「イエス様がこんなことを言われるなんて」と思われる方もおられるでしょう。

実は今回の箇所は、イエス様が十字架につけられた紀元 30 年頃から、マルコ福音書が書かれたとされる 60 年代後半頃の、初期のキリスト教団による伝承だという見方が一般的です。どうしてそう言えるのか。またそうだとしたら、わたしたちはこの箇所をどう読むべきなのか、一緒に考えていきましょう。

5、節ごとに

◆たとえによって隠されるもの

4:10 (そして) イエスがひとり (彼だけ) になられたとき、十二人と一緒にイエス (彼の) 周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。

4章1節から、イエス様はおびたしい群衆のために舟に乗って、たとえを語られていました。また35節以降にある「突風を静める」場面を読んでいきますと、そこには「イエスを舟に乗せたまま」と書かれてあります。

つまり、21節以降のたとえ集を含め、イエス様はずっと舟の上から語られていたこととなります。となると、イエス様だけになるというシチュエーションは考えにくい。そのことから、この部分は後の時代の付加だと思われるようです。



さて、人々は何を尋ねたのでしょうか。その後のイエス様の答えから考えると、「イエス様、どうしてあの人たちにたとえを使って話されるのですか」と聞いたのでしょうか。また13節を見ると人々は、「何を言われているのかよく分からないから教えて欲しい」と言っているようにも思えます。

わたしたちも聖書を読んでいて、同じようなことを感じる場合があります。なぜわざわざよく分からないように語るのですか。このたとえにはどのような意味があり、それはわたしたちにとって何を意味するのですかと。

4:11 そこで、イエス (彼) は (彼らに) 言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられて (与えられて) いるが、(あの) 外の人々には、すべてがたとえで示される。

その彼らに対し、イエス様は大変うれしい言葉をかけられます。「あなたがたには神の国の秘密が与えられている」。口語訳聖書ではこの「秘密」が「奥義」となっていました。「奥義」というと、苦勞して、努力して、そしてようやく到達するもののように感じます。例えば行列のできるラーメン店の免許皆伝のようなイメージでしょうか。

しかし、この「秘密」は普段は隠されているが、開示されるもののことを言います。ここで秘密を開示するのは、神さまです。あなたがたというのは、12人と一緒にイエス様のまわりにいた人たちです。思い出してみましよう。3章35節にこのような言葉がありました。「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、母なのだ」。

神さまのみ心を行う、それはイエス様の語る言葉を聞き、その交わりの中にあることだと、以前に説明しました。その人たちこそが、神の家族であり、マルコ福音書に出てくる群衆でした。イエス様の言葉を聞く群衆に、神の国の秘密が与えられているとイエス様は言われるのです。

それとは逆に、すべてがたとえて、すなわち「謎のまま」で示される人たちがいます。「あの外の人々」とイエス様は言います。ユダヤ教の中では、異邦人を指すのでしょうか。また初期キリスト教の中には宗教的な排他主義もありました。

それではわたしたちはどちらに属しているのでしょうか。イエス様の言葉を聞き、その交わりの中にいようとする者でしょうか。それとも…。

4:12	それは、『彼らが見るには見るが、認め（理解せ）ず、聞くには聞くが、理解でき（悟ら）ず、こうして、立ち帰って赦されることがない』ようになるためである。」
------	---

この言葉はイザヤ書 6:9-10 の引用です。

主は言われた。「行け、この民に言うがよい よく聞け、しかし理解するな よく見よ、しかし悟るな、と。この民の心をかたくなにし 耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく その心で理解することなく 悔い改めていやされることのないために。」

この箇所を読むと、出エジプトの際に神さまがエジプトの王ファラオの心を頑なにし、なかなかモーセたちを去らせなかった場面を思い起こします。イエス様も同じように、「あの外の人々」が救われないようにしたいのでしょうか。イエス様はすべての人を救うために来られたのではなかったのでしょうか。

これも、この箇所がイエス様より後の時代に付け加えられたのではないかと考えられている理由の一つです。

しかし何度もこの箇所を読んでいく中で、わたしはイエス様がこのように語りかけているように思えるのです。「あなたも見ているだけで理解していないのではないか。聞いているだけで悟っていないのではないか」と問われているように感じるのです。わたしたちは本当に神さまの言葉に聞いているのか、今一度思い返していきたいと思います。

◆「種を蒔く人」のたとえの説明

4:13 また（そして）、イエス（彼）は（彼らに）言われた（う）。「（あなたたちは）このたとえが分から（を理解し）ないのか。では（それで）、どうしてほか（すべて）のたとえが理解できるだろうか。

ここからたとえの説明に入ります。くどいようですが、ここから 20 節までも初期のキリスト教団の伝承だと考えられています。

さて、イエス様は叱責されます。つい先ほど「あなたがたには神の国の秘密が与えられている」と言っただけなのに、「あなたたちは、このたとえを理解しないのか」と彼らを叱るのです。

彼らの中には弟子たちも含まれていました。彼ら弟子たちは無理解な者としてマルコ福音書には出てきません。マルコ福音書によると、イエス様の十字架と復活を通してでないと、弟子たちにさえイエス様が何者なのか知らされないのです。

4:14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。

ここから 4:3～9 の説明が始まります。なぜこれらの箇所が初期のキリスト教団の伝承だと考えられているのか、簡単に説明します。

まず一つ目は、イエス様は他の箇所でこのような寓言的な言い方をしていないということです。例えば茨の中とはどういうことなのかなど、説明をする箇所が他に見られないということです。

次に、ギリシア語の単語を見ていくと、マタイ・マルコ・ルカ福音書にはあまり見られない単語が多く出てくるといことも、この説を支持しています。

さらに「種」ですが、前回の場面、最初の 3 つの土地にまかれた種は単数で最後のだけ複数だという話をしましたが、今回の種は全部複数になっているということ。これは後から書いた人が、「実を結ばない種もたくさんあるよね」という気持ちで複数形にしたのかもしれませんが。これらの要素が重なって、このたとえの解釈は初期のキリスト教団がおこなったのではないかと考えられているのです。

蒔く人は「言葉」を蒔きます。ヨハネ福音書では、「言葉（ロゴス）」はイエス様だといいます。「言葉」が蒔かれ続けること、それはイエス様の福音が宣べ伝えられ続けていることだとも言えるのです。そのことが初期キリスト教の中でとても重要だったのでしょう。

4:15 (で)、道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼ら(の中)に蒔かれた御言葉を奪い去る(う)。

ここから一つ一つの解釈がはじまります。まずこの「言葉(ロゴス)」について、思いを深めてみましょう。新共同訳聖書の訳のように、「神の言葉」、「み言葉」という意味も持つでしょう。また「福音」、「イエス様ご自身」、「イエス様の教え」、「イエス様が示された行い」、「神さまの愛」など、その種はいろいろなニュアンスを感じさせます。

サタンには「妨げる者」という意味もあります。その「言葉」を聞いてもなかなか受け入れられない人の心にサタンは来ます。そして彼らが「言葉」を受け入れるのを妨げるのです。

4:16-17 (そして)石だらけの所(地)に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、自分には(の中に)根がないので、しばらくは続いても(一時的なもので)、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。

根っこがない植物は、水分を吸い上げることができません。「言葉」をすぐに受け入れたとしても、その「言葉」の中に生きるという覚悟がないといけないということでしょうか。

「言葉」のために艱難や迫害が起こるという記述があります。イエス様の十字架、そして復活からマルコ福音書が書かれるまでの40年間も、キリスト教徒は迫害されていました。ユダヤ教やローマからの迫害により、多くの人は信仰を捨てざるを得なかったのでしょうか。

しかし、ここと18節に出てくる「蒔く」という動詞は、現在分詞が用いられています。そこには「言葉」を繰り返し、繰り返し植え付けようとする継続的な行為があらわされています。たとえ目の前で一緒に信仰を持っていた人が離れていったとしても、「言葉」を蒔き続けるのです。それが神さまのみ業であり、わたしたちに与えられた使命なのです。

4:18-19 また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれる(他の)もの(とはこういう人たち)である。この人たちは御言葉を聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな(ことについての)欲望(など)が心に入り込み(ってきて)、御言葉を覆いふさいで(窒息させ)実ら(を結ば)ない。

茨の中にいたことがありますか。わたしは昨日、こいのぼりのポールを支えるロープを張る時に、しばらく茨のような植物の中にいました。茨の中では暗く、少し背を伸ばすと体を痛めつけられます。ちょっとした動作すら起こすことが嫌になるのです。

この世の思い煩いや富の誘惑、欲望、それはいつの時代にもあるものです。あなたの思い煩いは何でしょうか。富に誘惑されていませんか。欲望はどうでしょう。それら一つ一つのことが、「言葉」があなたの中に根付くのをふさいでしまうのです。

4:20 (そして) 良い土地に蒔かれたものとは、(こういう人たちである。) 御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

しかしそれにもかかわらず、「言葉」を蒔き続けることによって豊かな収穫がもたらされます。

ある時は心が石のように固くなるかもしれない。ある時は茨が心を覆ってしまい、「言葉」が入り込む場所がなくなってしまうかもしれない。でも必ず、わたしたちの心は良い土地とされ、たくさんの実を結ぶと約束されます。そして今、頑なな人も、神さまは必ず良い土地に変えられる、そのことを信じて「言葉」を蒔き続けるのです。

<今日の箇所から>

この解釈をした初期キリスト教団の人たちは、イエス様のたとえを希望の言葉と受け取っていたようです。あなたたちは良い土地になりなさい、ということだけではなく、たとえ今、「言葉」を受け入れられない人がいても、神さまはずっと蒔き続けてくださるし、あなたも蒔き続けることで大きな収穫がまっているということを信じていました。そしてそれは実現しました。

わたしたちはすべての人がイエス様を受け入れてくれない現実を見ます。蒔かれた種が無駄になっていく、そのような思いを持つこともあるでしょう。しかし驚くことも、失望することもないのです。すべては神さまのみ手の中にあります。必ず神さまはその人の心に種を蒔き続け、無駄にした種の何倍もの豊かな収穫を約束されるのです。

わたしたちの心の中にも蒔かれた「言葉」に耳を傾け、大きく成長することを願い求めましょう。

今回の学びはこれで終わります。次回は5月28日(木)10時30分からです。「ともし火と稗のたとえ」、「成長する種のたとえ」(マルコ4:21~29)について学んでいきます。